

Title	スコットの調和のヴィジョン : Guy Mannering 論
Author(s)	米本, 弘一
Citation	Osaka Literary Review. 19 P.70-P.81
Issue Date	1980-11-30
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25626">https://doi.org/10.18910/25626</a>
DOI	10.18910/25626
rights	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

# スコットの調和のヴィジョン

## — Guy Mannering 論 —

米 本 弘 一

### I

Walter Scott は小説としての第三作 *The Antiquary* について次のように述べている。

The present Work completes a series of fictitious narratives, intended to illustrate the manners of Scotland at three different periods. *Waverley* embraced the age of our fathers, *Guy Mannering* that of our own youth, and the *Antiquary* refers to the last ten years of the eighteenth century. 1)

このようにスコットの最初の三つの小説は、18世紀中頃から末に至る一連の時代のスコットランドの歴史を扱ったものである。しかし、この三小説が共通するテーマを持ったものとして論じられることはほとんどない。第一作 *Waverley* は、はっきりとした歴史的テーマを持ったものとして独立して扱われることが多い。そして、*Guy Mannering* と *The Antiquary* は同一の傾向を持ったものとしていっしょに論じられるのが普通のようなのである。

その理由としては、それぞれの作品の扱っている題材の時代的、社会的性質の違いが挙げられる。*Waverley* のプロットの中心を成しているのは、1745年に起こった Jacobite の叛乱というスコットランドの歴史を大きく変えた事件である。ところが、続く二つの作品では、そのような歴史的イベントは扱われておらず、社会の激動が一応終わりを告げた後の穏やかな変化の時代が描かれている。また物語の舞台も、変化の影響が及びにくい田舎の閉鎖的社会となっている。従って、*Guy Mannering* と *The Antiquary* は、*Waverley* のような歴史的テーマを持ったものとしてではなく、冒頭にあげた引用文にあるスコットの意図通りのもの、つまり古い社会の“manners”

を描いたものとしてとらえられているのである。実際、地域社会の風俗や習慣、そこに住む人々の生活を描いた部分は、スコットの小説の中でもっともすぐれたものであることは否定できない。

しかし、*Guy Mannering* と *The Antiquary* とに、第一作 *Waverley* に連続する歴史的テーマを見出すことは決して不可能なことではなく、また無意味なことでもない。スコットの初期スコットランド小説の持つ大きなテーマは、歴史の変化によって生じる新旧の価値観の対立であり、その対立をいかにして調和させるかという問題である。このテーマを中心に据えて見る時、彼の最初の三つの小説は、一貫したテーマの展開を示すものと考えることができる。

*Waverley* については別の所で論じているので詳しくは触れないが、<sup>2)</sup>一言で言うならば、この作品は対立の物語である。新旧の社会の真正面からの衝突とも言うべき叛乱事件を扱ったこの作品では、歴史の変化の中のさまざまな対立的要素が非常にはっきりとした形で示されている。しかし、もう一つの重要なテーマである対立の調和という問題に対しては、スコットの第一作は必ずしも納得のできる解答を与えているとは思われない。その解答となるものが、それに続く二つの作品なのである。*Guy Mannering* は対立の調和の過程を、*The Antiquary* はその調和が達成された後の社会の様子を描き出している。

この「調和」というテーマを考える際、第二作 *Guy Mannering* は特に重要な作品であると思われる。先程述べたように、この作品の古いスコットランドの社会の“manners”の描写は非常にすぐれたものである。しかし、そこに描かれている“manners”の内容は、作品のテーマと深い関わりを持つものとなっている。また、それだけでなく、プロットや登場人物など作品中のあらゆる要素がテーマに集約される緊密な構成となっており、作品全体が「調和」のヴィジョンを形作っている。

そこで、ここでは、*Guy Mannering* に現われているスコットの理想的世界の姿を、*Waverley*、*The Antiquary* との関連にも触れながら、さぐってみ

ようと思う。

## II

*Waverley* において調和の試みが失敗した原因の最大のものは、叛乱の失敗という歴史的事実にあった。この事件によって、古い社会の価値観は一度完全に否定された形になっている。そのため、結末に示されている調和は、否定されたばかりの価値が急に取り戻されたように見えることから、説得力を持ったものになっていないのである。

*Guy Mannering* に描かれているのは、*Waverley* の叛乱の一世代程後の時代であり、古い価値がまだ残っている田舎の社会である。スコットは、このような穏やかな変化の中に生じる価値観の対立を描くことを通して、失われた価値を回復し、これを新しい価値と融合させようとする。そこでまず、この作品に現われている対立する要素について考察して見よう。

この作品で新しい社会の価値を代表するものは、近代的な「法」とそれによって保たれる「秩序」である。物語の初めに描かれているのは、その「法」が十分に浸透していない半ば封建的な社会である。この社会は、近代的な社会の側から見れば、無秩序で“lawless”な状態のものであると言えよう。そのような社会に「法」が取り入れられることによって生じる摩擦が、この作品における対立をもたらしている。この法のない社会と、法による秩序の社会との対立が、この作品を貫く重要なテーマである。

最初に描かれている古い社会においても、一応の秩序は保たれているように見える。それは、封建領主と住民との間の、また住民同士の感情的な結び付きによって成り立つものである。この社会の特徴をもっともよく表わしている存在は、法の外側にいる人間、“outlaw”たちであろう。この作品では、ジプシーと密輸業者(smuggler)がその中心となっているが、この共同体的地域社会は彼らの存在を受け入れている。そして、この法によらない社会の秩序を守る中心的人物は、領主Bertramである。彼はoutlawたちを取締まる法の存在を知っているが、彼らの活動を黙認し、ある時に

は法の迫害から保護してやろうとする。

領主は smuggler たちを “free-traders” と呼び、smuggler という呼び方は “law” の側の価値観によるものと言う。<sup>3)</sup> 自らもその恩恵を受けている彼は、関税のかからない品物を運んで来る彼らは、地域社会の人々の生活に必要な存在であると説明する。そして、彼らを取締まる役人に対しては、むしろ冷淡であり、彼らに手を貸すことはしない。smuggler たちはこの黙認という形での保護に対して敬意を払い、必ず領主の館に礼砲を発ってから出港して行く。

領主と smuggler との関係には、かなり互いの利害がからんでいる。ところが、もう一方の “outlaw” 的存在であるジブシーと彼との結び付きは、もっと感情的なものである。この定職を持たない放浪者の集団は、Bertram の領内に住むことを許されている。ジブシーたちは普通の人間がやらない仕事、結婚や子供の誕生の時の儀式、生活に必要なこまごましたものの生産などによって領主に奉仕している。それに対して、領主は彼らに「法」の迫害からの保護を与えるのである。スコットは、互いの信頼によって成り立つ彼らの関係を、古い社会の持つ良い面として評価し、次のような牧歌的とも言える描写を与えている。

The women spun mittens for the lady, and knitted boot-hose for the laird, which were annually presented at Christmas with great form. The aged sibyls blessed the bridal bed of the laird when he married, and the cradle of the heir when born. The men repaired her ladyship's cracked china, and assisted the laird in his sporting parties, wormed his dogs, and cut the ears of his terrier puppies. . . . These acts of voluntary service, and acknowledgments of dependence, were rewarded by protection, connivance on others, . . . 4)

Bertram は彼らを “exceeding good friend” と呼び、“the law of the country and the local magistrate” から守ってやる。スコットは領主とジブシーたちのこのような結び付きを “friendly union” と呼んでいる。<sup>5)</sup>

しかし、この一見平和な社会の秩序は、非常に脆い基盤の上に立っていることがしだいに明らかになってくる。法による規則ではなく、互いの信頼関係によっているこの社会は、その関係が崩れた時、暴力と無秩序の支配する状態に陥ってしまう。本来社会の秩序の外にある outlaw たちは、その時、危険な存在に変わる。

その秩序の崩壊は、皮肉なことに、Bertram が「法」の側の人間、“justice of peace” となったために引き起こされる。彼は職務に忠実であろうとする余り、「法」を厳格に適用しようとする。そのため彼は、上に述べたような、古くからの結び付きを断ち切ってしまう。彼はまず、ジプシーをはじめとする定職を持たない者を追放する。この余りにも性急な領主の行動を、スコットは、突然権力を握った者の愚行として批判的に描いている。Bertram のやっていることは、“unmitigated activity in the discharge of his duty”<sup>6)</sup> なのである。

次に彼は、役人と協力して smuggler を捕え、密輸品を没収する。そのため smuggler たちは本来の姿である海賊となり、役人と戦うことになる。そして遂に、領主の下で働く役人が殺され、戦いに巻き込まれた領主の息子は連れ去られ消息不明になるという事件が起こる。ここに至って、古い社会の価値は失われ、社会の秩序は崩壊する。しかし、その原因となったのは、近代社会の持つ価値、秩序をより確かなものにするはずの「法」であった。この事件は、新旧の価値の間の誤解によって生じたものだと言えることができよう。

### III

物語は、この誘拐事件の後、17年間の空白があり、領主の後継ぎが自分ではそれと知らず生まれ故郷に帰って来て、放浪し、最後には認められ家に戻るというプロットが中心となる。この古くからロマンスに使われて来た “lost heir” の物語は、次作 *The Antiquary* でも使われている。スコットが、この二つの作品で、いかにもロマンス的な、いわば出来合いのプロット

トを採用した理由の第一のものは、先に述べたこれらの作品の題材の時代的、社会的特徴である。変化がやや落ち着きを見せて来た時代の、田舎の閉鎖的社会を描いた作品では、本来ならば事件らしい事件も起こらないのが普通であろう。しかし、スコットは、そのような社会の風俗や生活を描くだけでは、読者の興味をつなぐことができないと考えたようである。そのため彼は、このロマンス特有の“uncommon and marvellous”<sup>7)</sup>な出来事に満ちたプロットを選んだのであった。この点が、スコットとオースティンとの大きな違いの一つであろう。

そのため、このプロットは、作品の内容とは全く関係のない、プロットのためのプロットのようなものと見なされ、あまり重視されていない。例えば Daiches は、*Guy Mannering* については “the plot is simply an excuse for bringing certain characters into relation with each other”<sup>8)</sup> と *The Antiquary* に関しても、“The external plot, which is once again that of lost heir, is, as usual, not to be taken seriously.”<sup>9)</sup> と言っている。

しかし、このプロットは、作品の歴史的テーマとの関係において考えて見るならば、意味を持ったものであることがわかる。特に *Guy Mannering* の場合には、崩壊した秩序の回復という「調和」のテーマとこのプロットとは深く関わり合っている。そこで次に、この作品のプロットの持つ意味を考えてみたい。

スコットの初期小説には、“lost heir”の物語に限らず、主人公の若者が放浪の旅をするというパタンのプロットが必ずと言っていいほど使われている。この放浪する若者は、性格は受動的であり、小説の主人公としては読者の共感を引き起こしにくい存在である。このタイプの主人公については多くのことが論じられているが、彼らは個人として描かれているのではなく、作品のテーマとの関連において、何らかの意味で象徴的な役割を負わされているというのが一致した意見のようである。<sup>10)</sup>

主人公の体験の持つ象徴的な意味を考える時、もっとも重要と思われる概念は“identity”というものであろう。彼らの放浪はすべて何らかの形で

の自らの“identity”を求めての旅となっている。この“identity”は多くの場合精神的なものである。つまり、若者が大人になって行く過程で、社会における自分の位置を認識することを意味する。その典型的な例が、*Waverley*の主人公 Edward Waverley である。彼の場合には、その個人のレベルでの体験が、近代社会に生まれ変わるという社会的レベルでの体験を象徴している。

*Guy Mannering*と *The Antiquary* で求められている“identity”は、文字通り「自分は何者であるのか」という、身元に関するものである。主人公は幼い時に親の所から連れ去られたために、自分が誰の子であり、どこで生まれたかということを知らない。*Guy Mannering*の主人公 Henry Bertram は、自分の本当の名前さえ知らないのである。*Waverley*では、主人公は個人として描かれている側面も持っており、彼は単なる象徴的存在ではない。ところが、*Guy Mannering*の場合には、主人公の性格や心理などはほとんど描かれていない。彼に関する読者の興味は、彼の身元が判明する過程に集まる。この作品では、主人公に関するプロット自体が象徴的な意味を持っているのであり、彼はより純粋な意味で象徴的な存在となっている。

主人公 Henry Bertram が誘拐されたのは単なる偶然ではなく、先程説明したように、彼の父親の愚かな行ないが原因である。彼の“identity”の喪失は、古い社会の価値の崩壊、領主と住民との間の誤解、秩序の消失と同時に起きている。

成人してスコットランドに戻って来た主人公は、混乱した社会で繰り広げられる対立に巻き込まれる。Bertram家没落後新しい領主となるのは、父 Bertram の使用人であった Glossin という法律家である。彼が主人を追い出して領主となった過程は、表面的には“lawful”なものであり、法律的には全く責められないものである。しかし、彼が法律の知識を悪用した事は確かである。従って、住民は道義的に彼を非難し、“upstart”である彼を“gentleman”とは認めず、領主として受け入れない。



さらに、Glossin は裏で outlaw たちと結びついていることがしだいに明らかになる。主人公の誘拐は、彼が smuggler たちをそそのかしてやらせたのである。この法の悪用者と outlaw たちは、主人公の“identity”の回復を阻止しようとする。一方、古い領主に好意を寄せる者たちは彼を守ろうとする。この争いに巻き込まれた Bertram は、自分の身元を知らないもので、なぜ理由もなく迫害されたり、知らない人間によって救われたりするのかわからず、戸惑いを感じる。このように、まわりの状況に押し流され、言われもなく運命にもあそばれているかのような印象を与えるのが、スコットの初期小説の主人公たちの特徴の一つである。Bertram の場合、父の愚行の結果である放浪におけるこの試練は、父親の犯した罪に対する償いの過程を表わしていると考えられる。

この贖罪が完了するためには、秩序の混乱をもたらしている悪が浄化されなければならない。その浄化されるべきものとは、古い価値と新しい価値とが持つ否定的な面である。それは、具体的には、古い社会の暴力性、無秩序を代表する smuggler であり、新しい社会の価値、「法」を悪用する Glossin である。彼らが排除されると同時に、主人公の“identity”は確立され、領主として住民に受け入れられる。このことによって、父親によって破壊された社会の秩序は、その息子によって再び取り戻される。このように、主人公の象徴的役割には、儀式的な要素が含まれている。

#### IV

この「調和」の儀式において重要な役割を果たしているのが、ジプシーの女王と呼ばれる Meg Merrilies である。キーツは、1818年にスコットランドを旅行した時、この小説の舞台となった地方を訪れ、彼女のことをうたった詩を妹に書き送っている。<sup>11)</sup> 彼女は、詩人の想像力をかきたてるに十分な外貌と性格の持ち主である。その人目を驚かす姿は次のように描かれている。

She was full six feet high, wore a man's great-coat over the rest of her dress, had in her hand a goodly sloe-thorn cudgel, and in all points of equipment, except her petticoats, seemed rather masculine than feminine. Her dark elf-locks shot out like the snakes of the gorgon, between an old-fashioned bonnet called a bongrace, heightening the singular effect of her strong and weather-beaten features, which they partly shadowed, while her eye had a wild roll that indicated something like real or affected insanity. 12)

彼女の役割は元々呪術的、儀式的なものである。主人公 Henry Bertram の誕生の時にも、彼女は彼の運命を占うために現われる。呪文をとえながら糸を紡ぎ、その長さを測ることによって予言する彼女の姿には運命の女神を思い起こさせるものがある。彼女は "ancient attachment to the family"<sup>13)</sup> によって領主の家に結び付けられている。領主の方も彼女の存在を許し、保護してやっている。Meg Merrilies は、この地域社会の守り神的存在であったと言えよう。

領主の裏切りによって追放されることになった時、彼女は激しい怒りを示す。追われて放浪の旅に出るジブシーの群れと領主とが偶然道で出会う場面での彼女の激しい呪いの言葉は、この作品の中でもっとも有名な箇所であり、たびたび引用されている。しかし、彼女は父親 Bertram に対しては怒りを感じているが、幼い息子 Henry とこれから生まれて来る子供には何の罪もないことを知っている。彼女の言葉の中に次のような所がある。

... not that I am wishing ill to little Harry, or to the babe that's yet to be born — God forbid — and make them kind to the poor, and better folk than their father! 14)

彼女は、Henry が愚かな父親よりも立派な人間となり、父の罪を償うことによって秩序を回復することを願っているのである。

スコットランドに帰って来た Henry に出会った彼女は、一目で行方不明となっている領主の後継ぎであることを認める。しかし、彼女はそのこ

とを彼に教えない。彼女は、彼が放浪によって贖罪の試練を経なければならぬ事を知っているかのように、彼が自分で“identity”を取り戻す方向へと導く。道に迷って smuggler の住み処にやって来た Henry を救ってやった彼女は、何も知らない彼に向かって、“I shall be the instrument to set you in your father's seat again.”<sup>15)</sup> と言う。

結末における社会の浄化による秩序の回復の儀式を演出するのも Meg Merrilies である。彼女は、Henry と彼を誘拐した smuggler とを対決させるように仕向ける。彼女は他の者の同行を許さず、Bertram と彼の友人だけを連れて smuggler の隠れ処に乗り込むのである。海賊の逮捕によって、新しい領主 Glossin の旧悪は暴露されることになる。海賊との戦いの中で、彼女は撃たれて倒れる。

知らせを聞いて集まって来た住民たちに対して、死を前にした Meg Merrilies は、Bertram の手を取り、本当の領主が戻って来た事を告げる。これは、父親の罪を償った彼が、領主として受け入れられるための initiation の儀式と考えることができよう。Meg Merrilies はその儀式を司る巫女なのである。

このように、Meg Merrilies は、古い社会の持つ肯定的な価値である個人的な結び付きを代表する存在であり、失われた人間関係を取り戻す役割を果たしている。しかし、結末の調和のヴィジョンには、新しい価値の存在も欠くことのできないものであることを見逃してはならない。そうでなければ、古い価値を回復するだけでは結局過去に逆戻りしたことになり、より確かな秩序は得られないからである。

最終的に Bertram の identity を確立するのは、近代的な「法」の力である。彼が死んだ父親に生き写しであることは誰もが認めている。しかし、それだけでは十分でなく、彼が Bertram 家の後継ぎであることを証明する法的な証拠が必要である。そのために、17年前の事件の再捜査が法律家たちの手によって行なわれる。自らも法律家であったスコットは、その過程を詳細に描いている。

ここでは、正しく用いられた「法」は新しい社会の肯定的な価値を代表するものとなっている。従って、法律家たちは Meg Merrilies の Bertram 家に対する忠誠心は評価しているが、“outlaw”の代表である彼女は結局は否定されるべき存在であることを示唆する。彼らは彼女が事件の真相を知っていることをつきとめるが、ジプシーである彼女には法廷での証言能力はないと言う。彼女自身もその事をよくわきまえており、犯人逮捕の前に Bertram に向かって、殺さず生捕りにして、後は“law”にまかせろと言うのである。<sup>16)</sup>

## V

以上、主としてプロット、人物の役割の考察を通して、*Guy Mannering* に展開される調和のヴィジョンを見て来た。*Waverley* で成し遂げられなかった新旧の価値観の融合が、この作品では見事に成功している。

最後に、この作品の題名となっている *Guy Mannering* という人物について一言しておこう。彼もまた、調和のテーマに関して重要な役割を果たしている。彼の物語は、主人公 Bertram の物語に対するサブ・プロットを成すものである。彼は物語の初めにスコットランドを訪れ、古い社会の生活に愛着を覚える。インドでの体験によって人生に疲れた彼は、安住の地を求めて再びこの地方に帰って来る。しかし、そこでは彼のあこがれた社会は崩壊しかかっていた。彼はこの社会の秩序を取り戻すためにすべての人物をつなぐ役割を演じる。この作品では、人間同士の誤解の解消によって調和が得られるのであるが、彼はその和解の中心となる調停者なのである。また、彼自身も娘との間の断絶という悩みをかかえており、父と娘との和解の過程が、社会の秩序の回復と並行して描かれている。

この *Guy Mannering* という人物の背後には、作者スコット自身の姿を見ることができる。彼は作者が理想とした世界を追求する人物なのである。前作 *Waverley* でも、主人公の中に作者自身の姿が投影されていた。そして、次作 *The Antiquary* では、題名となっている人物「好古家」の生活は、調

和によって生み出されるスコットの理想的生活を体現している。

このように、スコットの最初の三小説では、標題となっている人物にも一貫性が見られる。しかし、この問題については別の機会に論じることになろう。

## 註

- 1) Walter Scott, "Advertisement" to *The Antiquary* ("Border Edition"; London: John C. Nimmo, 1893), I, vii.
- 2) 「スコットの二面性—*Waverley*に見られる初期小説の特質」(『山川鴻三教授退官記念論文集』英宝社, 1981).
- 3) Walter Scott, *Guy Mannering* (2 vols., "Border Edition"; London: John C. Nimmo, 1892), I, 46.
- 4) *Ibid.*, I, 61.
- 5) *Loc. cit.*
- 6) *Ibid.*, I, 53.
- 7) Walter Scott, "Essay on Romance", *Novelists on the Novel*, ed. Mirian Allot (London: Routledge and Kegan Paul, 1959), p. 49.
- 8) David Daiches, "Scott's Achievement as a Novelist", *Scott's Mind and Art*, ed. A. Norman Jeffares (Edinburgh: Oliver and Boyd, 1969), p. 34.
- 9) *Ibid.*, p. 37.
- 10) Alexander Welsh, *The Hero of The Waverley Novels* (New York: Atheneum, 1968), etc.
- 11) *Letters of John Keats*, ed. Robert Gittings (London: Oxford University Press, 1970), pp. 111-12.
- 12) Scott, *Guy Mannering*, I, 20.
- 13) *Ibid.*, I, 66.
- 14) *Ibid.*, I, 72.
- 15) *Ibid.*, I, 258.
- 16) *Ibid.*, II, 285.